

山県有朋とその館

佐藤 信

一 はじめに

問題の所在——なぜ山県有朋の館なのか

権力者は、それが政治的人間である限りにおいて、政治的空間のなかに暮らしているし、逆に彼／彼女の暮らす空間は政治化されることを余儀なくされる。だが、空間はどのように政治的意味付けを獲得し、どの程度政治的に機能しうるのだろうか。本稿はこうした政治と空間、特に権力者とその館との連関のメカニズムを解説せんと試みるものである^①。

本稿が事例とするのは山県有朋とその館である。言うまでもなく、山県有朋は明治期から大正期にかけての政治史を語るにあたつて欠くことのできぬ人物である。一八三八（天保九）年に長州藩に出生

してから、奇兵隊に参加して倒幕運動に参与し、明治政府において陸軍卿、内務大臣などの要職を歴任してから首相、枢密院議長を務め、一九二二（大正十一）年に亡くなるまで元老として活躍した^②。陸軍を中心とする彼の人脉は外部からは「山県閥」と呼ばれ、かつては「軍国主義」の淵源として語られ、現在でも戦前の政党政治の隆盛に対する主たる対抗勢力であつたとされている^③。近代日本の権力者の代表例として山県に不足はないだろう。

加えて、山県は近代日本の権力者たちのなかでも特に空間に興味を持った人物である。その空間の魅力は、日本における西洋建築史研究の尖端たるべしと期待されていた鈴木博之が、一九八〇年代後半ごろから「維新の立役者の中では山県有朋がいい」とか、「小川治兵衛の庭について考えるため、鞍馬（^{アサマ}）の谷川を見に行つてきた」とか、わけのわからないことを言いはじめ^④（藤森照信）、日本

建築史へと大転換することになったことからもうかがわれよう。こうした山県をめぐる空間は、権力者と空間についての尖端的事例を提供してくれるだろう。

実際、山県の椿山荘、無隣庵、古稀庵の庭園は高い評価を受け、なかでも無隣庵の庭は、それを作庭した七代目小川治兵衛にとつて新たな作庭スタイルを確立する画期になったと言われている（椿山荘、古稀庵の作庭は岩本勝五郎である）。ところが、これまでこれらの空間づくりはあくまで山県の趣味人としての性格を表すものとされ、政治との関係が論じられることは少なかった。しかし、同じ人間によつてなされるものである以上、政治の世界と趣味の世界とが隔絶されているということはありえない。^⑤筆者個人としては、政治自体をアクターの個人的人格をも含んだ営為として捉え直すべきだとも思う。だが、仮に政治の世界と趣味の世界を別物として捉えるにせよ、空間というものは政治か趣味かという本来の目的を越えて、双方を覆う。例えば、いかに趣味性が強い空間であろうとも、それは政治的にも利用されるのである。こうした観点から、本稿では山県の館を、あくまで政治家・山県との関係において捉えてみたい。^⑦

館の概要

本論に入るにあたって、まず山県の館の全体像を一望しておきたい。すでに紹介したように、山県はいくつかの館を持っていたため、

ともすれば混乱が生じやすいからである。これらの館をまとめて整理したものとしては、これまでのところ鈴木博之の研究が最も優れている。^⑧鈴木は元勲の館のあり方をイギリス貴族のそれと重ねて捉えることで、以下のような整理を提示した。

本邸 椿山荘（一八八七～一九一八）↓新椿山荘（一九一七・

十一～）

東京別邸 新々亭（一八九二頃～）

京都別邸 第二次無隣庵（一八九一・七～一九九二・十一）

↓第三次無隣庵（一九九六・十二～）

湘南別荘 小湊庵（一八八七頃～一九〇七）↓古稀庵（一九〇七～）

農場 那須山県農場（一八八二～）

鈴木は、こうした役割別の邸宅配置について「東京に本邸を構え、京都に別邸をもち、その他に農場とカントリ・ハウスをもつという形式が明治期の上層階級にとつての理想形式であつたのである」と述べている。ちなみに、無隣庵が第二次や第三次となっているのは、初めの無隣庵は山県の故郷である長州吉田の清水山に営まれたためである。近年の研究では原風景研究を反映して、長州の風土や地形と山県の庭園との連関を見出そうとする研究もあり、故郷の風景も無視することはできないのだが、本稿ではとりあえず明治期以

降の彼の権力の館に注目する。

一点注意を要するのは、後に見るように、それぞれの館の成立時期には再検討の必要があり、また鈴木役割別利用説自体にも再考の余地があることである。実際の山県の館の利用をしてみれば、山県はこれらの館をうまく使い分けていたわけではなく、新々亭や山県農場などはほとんど利用されなかったし、他の館の役割も時期によつて変化した。詳しくは、これから見てゆくことになる。

研究枠組

本研究では、『山県有朋関係文書』^①と「田中光顕関係文書」^②における書簡を中心に、それぞれの館の役割がいかに変化したかを追跡する。ここで主として書簡を用いるのは、館における政治的活動をうかがうことができるのみならず、山県がどのように認識されていたか、宛名を通して透かし見ることができるとためである。^③例えば、山県が同じように椿山荘に滞在しているときでも、山県に対して「山県大将」と書く人もいれば、「芽城様」（椿山荘があつた目白のこ）とか、「椿山荘主」とか、時期や差出人によつては「無隣庵主」と書く人もいる。つまり、書簡の宛名は現実の滞在场所だけでなく、そのイメージを映し出すのであり、それを観察することで山県がどの館と関連付けて認識されているか、ひいては館がどのように認識されているか理解することができる。本稿では、このような部分を

子細に観察することで、権力者の館の動態に迫つてみたい。

二 椿山荘

椿山荘の成立

山県が兵部大輔に任じられたとき、上京した彼は龍閑橋付近（現在の神田附近）の厚東次郎助のもとに寄宿する生活を送つていたというが、『太政官職員録』によればやがてその東京における館は「麹町区富士見町一丁目一番地」へと移つた。ただし、五番町の邸宅を利用するなど（新椿山荘の箇所後述）、その住居は安定しなかつた。富士見町や五番町の土地自体はその後も所有されたようだが、^④山県の住居のイメージがなかなか安定しなかつたことは、当時の山県宛書簡の宛名に「無隣庵」を含むものが多く見られることから看取されよう。^⑤「無隣庵」とは彼の長州における住まいであつて、この宛名は周囲の彼の住まいのイメージが富士見町や五番町の邸宅には固着せず、かつてのイメージを引きずつていたことを示すからである。

このことは我々にさつそく教訓を与えている。それは、宛名は固着したイメージに拠るために、宛名に「芽城様」や「椿山荘主」と書かれていても、山県の実際の居場所が別のところ、例えば大臣官舎や総理大臣官邸ということもありえるということである。実際、

時期を明確にすることはできないが、山県は大臣など要職にある間、しばしば官舎を利用した。官舎への居住は椿山荘が完成してからも変わることがなく、山県が官舎から椿山荘に戻ることを「帰山」と呼んでいたように、その時期には官舎が本邸へ、椿山荘が「山荘」へという変化が生じたのである。⁽¹⁷⁾ このことが示すもう一つの教訓は、本邸が定めて一つだと思いついてはならないということにほかならない。

このような振幅が存在するとはいえ、とりあえずは山県の根城と言える椿山荘が成立したのは一八八七（明治二十）年、現在ホテル椿山荘となっている地所においてであった。とはいえ、その館は当初から「椿山荘」として認知されたわけではない。そもそも、庭園を楽しむような文化的コミュニティを除けば館はその持ち主（山県邸）かその地名（目白、大磯など）で呼びならわされることが多い。このため、山県のイメージがいかに椿山荘という場所に定着したかを計るには「芽城」や「目白」といった記号に拠るしかない。実際、椿山荘滞在中の山県自身は当初は「芽城山人」という自称を利用し、政治的コミュニティ内では度々「芽城」と呼称された。しかし、新聞報道における呼称は「関口台町」などと一貫せず、「目白」もしくは「目白台」という名称が定着するようになったのは、管見の限り、一八九〇年代後半になってからのことである。ある地名がある人物を指し示すという共通認識が形成されるためには、当該人物の

確固たる社会的地位が必要不可欠であることを考えれば、この時期に至って山県の東京における権力基盤はようやく確立したと見ることもできよう。

椿山荘と芭蕉庵

ところで、政治的空間としての椿山荘を特徴づけているのは隣地の田中光頭の芭蕉庵である。山県と田中は、ともに長州出身で親しい関係にあったが、本邸の近接はその関係をより近づけた。田中の手許に残された「御閑も有之候は、散歩旁御投杖相待申候」といったような大量の短信は両者の関係をよく示している。なかには「ねまきの俣にて」夫婦で晚餐にと誘うものもある。⁽²¹⁾ これらの短信を観察すると、年長の山県が田中を呼ぶことが多かったようだが、山県が約束なしに田中邸を訪問することも度々あったことがうかがわれる。⁽²²⁾ 隣地ゆえにこれらの行き来には裏門が利用可能で、報道機関に知られないという利点もあつたのだろう（もちろん、隣地であるということによって、そういった行き来があるという詮索を受けることは覚悟しなければならないが）。⁽²³⁾ そればかりか、田中は椿山荘の留守を常に預かつており、時には山県の敷地の一部を借り受けることまであつたという。⁽²⁴⁾ 邸宅の距離ばかりではなく、庭園がコミュニケーションツールとなつて、両者の親密な人間的関係を支えていたのである。

こうした両者の緊密な関係は、山県が古稀庵を、田中が静岡県岩淵に古谿莊を営み、行き来が希薄になると、「御無沙汰」⁽²⁶⁾になり、田中はやがて財政的理由から芭蕉庵を手放すことになった。書簡を見る限り、両者の関係が悪化したわけではないから、山県と田中との関係の推移は、邸宅の物理的近接が人的接触の頻度と親密性にかに影響を与えるかの一つの例証となろう。もつとも、このような近接の効果を知れば、それを積極的に利用しようとする者が出てくるのも当然で、古稀庵の場合にはそれが端的に観察されるようになる（後述）。

三 無隣庵の成立⁽²⁸⁾

第三次無隣庵の成立とその意義

山県は一八九一（明治二十四）年五月に首相の職を辞してから、その七月に京都木屋町二条の旧角倉別邸を取得し、無隣庵と名付けた。いわゆる第二次無隣庵である。翌年の書簡中に「加茂川も已に落着仕候由」⁽²⁹⁾という文言があるのはこの館を指すものであろう。この館は、敷地の拡張が叶わなかったという事情があり、一八九二年十一月には売却された。つまり、第二次無隣庵が機能していたのは一年余りということになる。

ただし、書簡はその期間の前にも、後にも、山県が同邸を利用し

ていた可能性を示唆している。例えば、一八八九年四月の山県宛品川弥二郎書簡に「くれぐれも他日高瀬頭しらの御別荘を思ひ出して現今之御撰養が専要なり」⁽³¹⁾とあるのは、この頃には少なくとも地所の選定が済んでいたことをうかがわせる（後述の通り、一八八八年以前まで遡る可能性もある）。さらに、一八九三年の書簡中には「木屋町御邸」という言葉が登場しており、こちらは第二次無隣庵が売却後もしばらく使用されていた可能性を示す。こうして見ると、第二次無隣庵の実質的稼働期間は一八八八年から一八九三年まで延長される可能性がある。

とはいえ、その後長く使われた第三次無隣庵が第二次無隣庵と比較して圧倒的に重要であることは疑いない。第三次無隣庵の建設地に南禅寺畔の土地が検討されたのは、第二次無隣庵の地所が売却されてすぐのことである。一八九三年三月の田中光顕宛ての書簡には以下のような記述がある。

「扱、来月比より生野辺御巡遊之企図被相立候趣了承。其節京師南禅寺畔別墅え玉杖を留めらるへき思召被仰聞、是亦老生之大に所望に付、早速久原え此趣申遣し可置に付、御出発前同人え御一報相成候様所願候」⁽³³⁾

邸宅について山県の全幅の信頼を得ていた田中光顕は、地所の選

定から第三次無隣庵増築に関わることになったのである。田中は、日清戦争で山県が不在の間、建設の協力者であった久原庄三郎とも直接連絡を取りながら、⁽³⁴⁾ 山県にも図面や計算書を送付するなど、すべての「指揮」を担当した。⁽³⁵⁾ この館の建設は一八九四年から開始され、翌年には一応の竣工を見たと言われている。⁽³⁷⁾ 田中は、一八九五年二月、増築中の地所の様子を山県に報告している。

「此度御転居の場処は至而閑雅幽静に而、眺望も宜しき様子に承り幾分か御健康上にも可宜奉存候」⁽³⁸⁾

山県はこれに満足していたようで、四月には田中に次のように書き送っている。

「扱、南禅寺畔別墅は新築築瀟灑水声松籟に和し貴意に適したる報道を得、必らず我心に叶ひ可申と相樂居申候」

「猶、老生は木屋町常盤屋西洋館に滞留可致合に付、別業には何等さし支り無之、是亦御合置可被下」⁽³⁹⁾

ここから、第一に、山県が戦後の作庭を楽しむに、敢えてこの造築に関与していなかったことが明らかにになる。このことは、山県が建築ではなくもっぱら庭園に興味を持っていたことを示すもので興

味深い。また第二に、建築自体は一八九五年四月までには完成していたものの、滞在できる状況にはなかったことも明らかにになった。確かに、この山県の書簡の通り、大本営の移動に伴って京都に滞在した際、山県は（常盤屋ではなく）京都ホテルに滞在して、第三次無隣庵を利用していない。⁽⁴⁰⁾

山県がこの館を利用したのが確認されるのはこの年の十月のことである。⁽⁴¹⁾ だが、冒頭の鈴木博之の整理を参照すれば明らかな通り、この成立は先行研究よりずっと早い。なぜ、ここまで差異が生じているかと言えば、それは先行研究が庭の完成をもって第三次無隣庵の成立と看做したからである。確かに、この十月の滞在においては「白雪紅樹之間を逍遙」⁽⁴²⁾ しているというような記述はあつても、彼が作庭を指示したという記録はなく、山県による作庭が本格化したのは一八九六年以降のようである。『京都日出新聞』には以下のような記述が見える。

「山県侯爵近日帰東すべしと東京の新聞は報ずるも聞く処に依れば侯は目下取急ぎ帰東すべき用向きとはなく殊に南禅寺別荘の庭園取掘工事未だ竣工せざれば此指図をしながら来月中旬頃まで当地に閑遊し其上久々に山口へ帰省する心組なれば或は郷里にて越年することに為るやも図られずと云ふ」⁽⁴³⁾

（二八九六年十一月二十九日）

こうして、一八九六年十二月に庭園の拡張工事がひとまず完成し、第三次無隣庵が成立したとされるのである。⁽⁴⁾ところが、山県の築庭が終わったかと言え、そうではない。翌年の『京都日出新聞』にもなお以下のような記述が見えるからである。

「南禅寺別荘に閑居せる山県大將は爾來何れへも出でず庭園築造の指揮などして日を送り居り臨時急用の用向きさへ起らざれば来四月中滞在する予定なりと」⁽⁴⁵⁾（一八九七年三月二十日）

この築庭作業が決して小規模のものでなかったことは、一九〇一年四月二十三日に無隣庵を訪問した二宮熊次郎が山県に宛てた書簡において、「去る「明治」廿九年「一八九六年」に拝見致候時とは全く別之御庭園と相成り、泉流之妙言ふ可からず殆ど感嘆仕候」と書いていることから明らかである。⁽⁴⁶⁾二宮はさらにこの時点ですら「周囲之牆壁修築中」だったと書き残しているから、庭園の完成という観点から見ても、鈴木博之の整理の如く一八九六年十二月をもつて第三次無隣庵の成立と見るのは必ずしも相応しくない。

そもそも矢ヶ崎善太郎の研究によれば、この土地の一部は一八九六年まで久原庄三郎の所有地、その他大部分は一九〇二年まで京都市の所有地であつたから、土地所有という観点から、成立を一九〇二年と見ることもできるわけで、第三次無隣庵の成立をどの

時点に見るかはもつぱら定義の問題に帰着することになる。とはいえ、庭園としての完成の時点が必ずしも明確ではなく、土地所有が邸宅使用の時期と必ずしも対応していないことを考えれば、とりあえずは邸宅として利用可能になった一八九五（明治二十八）年十月を第三次無隣庵の成立時点と見るべきだろう。

さて、成立をどの時点と看做すにせよ、第二次無隣庵から第三次無隣庵への移行は山県の各邸宅の意味を大きく変化させた。年代推定のできる書簡の数が十分ではないため暫定的見解ではあるが、山県はそれまで欧州行きの船からでも、大磯からでも、京都からでも、また大本営の広島からでも「芽城」という名称を使うことが多かったが、第三次無隣庵が成立してから「椿山莊主」、「無隣庵主」、「小洵庵主」といったような名称を使い分ける傾向を強めたように思われる。彼はそれぞれの館で、異なる衣を纏うが如く振る舞うようになったのだ。

この認識の変化が山県本人に留まらなかったことは、田中光顕が、この時期になって初めて京都滞在中の山県に「無隣庵主」という宛名を使ったことによつてもうかがわれる。⁽⁴⁷⁾それまで田中は、東京の館の近接を利用して同質性を強調するという目的もあつたのだろう、それまで山県の居場所にかかわらず一貫して宛名に「芽城」を用いていた。ところが、造営への協力の影響もあつたのだろうか、ここへきて山県の京都別邸を認めざるをえなくなったのだ。

滞在する館によつて主の行動が変わることは当然であるけれど、館の主の呼称が館の名称と同化するまでに至つたとき、主は館によつて変身する。椿山荘では「椿山荘主」として、無隣庵では「無隣庵主」として、小湊庵では「小湊庵主」として、まるで別人格のように行動することが自他ともに了解されるのだ。鈴木博之は館が役割別に利用されていた可能性を指摘したわけだが、そうした役割別邸宅利用の形態は、邸宅と人格とが共振するこの時点において典型的に観察されることになるだろう。

なぜ東山か

なぜ山県が東山南禅寺前の土地を第三次無隣庵の地所に選んだのかについては、いくつかの理由が挙げられるが、近年の研究で必ず指摘されるものに琵琶湖疏水の存在がある。一八九〇（明治二十三年）に完成した琵琶湖疏水（第一疏水及び疏水分線）は、京都の灌漑を目的に琵琶湖から山を貫いて引かれた疏水で、無隣庵のすぐ脇を通つて鴨川に流れ込む。無隣庵はこの疏水の水を取り入れて庭の流れをつくっているのだ。「水ナキ庭ハ庭ニ非ズ」⁽⁴⁹⁾と宣言するほど庭園における水の流れを重視した山県にとつて、この水を利用できたことが重要だったのは言うまでもなく、その庭園の構成における重要性も、小川治兵衛がこの琵琶湖疏水を巧みに利用しながら南禅寺周辺の別邸建築の庭を次々と手掛けたことから理解されよう。さ

らには、京都の三大事業と言われたこの琵琶湖疏水建設と山県との内務省を通じたつながりも広く指摘されるところである。

しかし、東山がそれ以前から注目されていたことにも十分な注意が必要である。第二次無隣庵の鴨川沿いという地所が山県にとつて魅力的だった理由の一つは東山の景色であった。興味深いことに、山県はかなり古い時期からこの山に特別な愛着を持っていたようなのである。そのことは彼の詩のなかにうかがうことができる。戊辰戦争の後、彼は「葉桜日記」のなかに東山に遊んだ経験を記している。⁽⁵⁰⁾

「ひかし山わか柴かくれにまゐりてむかしをしたふ花のおもかけ」⁽⁵¹⁾（一八六七年五月十六日）

「かやりたくけふりうすれて東山つきもおほろの春のおもかけ」⁽⁵²⁾（一八六七年五月十七日）

「満眸新緑暁雲輕 細雨無端又欲晴 最是東山好風景 幾層高塔霧中生」⁽⁵³⁾（一八六七年五月二十四日）

この光景は忘れがたかったようで、彼が欧州視察の途中ロンドンから木戸孝允に送った書中にも「墨水東山之風景、折々打寄相語

候⁽⁵⁴⁾』という記述が残っている。話の相手はおそらくロンドンでの同居人であった河瀬真孝（石川小五郎）で、彼も同郷で遊撃隊総督として山県とともに戦った仲間であるから、同じような感覚を共有していたものと思われる。加えて、東山は維新とともに戦った同志たちが弔われている場所でもあった。八十三歳まで毎年墓参りを欠かさなかったという山県にとって無隣庵はそのための足場でもあったから、東山は多分に自分の来し方を振り返る記憶装置だったのである。こうして、山県における京都の館は幕末維新の記憶と強く結びついていた。

山県の京都別邸誘致

このことは山県の田中光顕に対する京都別邸誘致にも見ることができる。⁽⁵⁵⁾ 山県が誘致を行ったのは一八九一（明治二十四）年頃、すなわち山県が第二次無隣庵を利用中のことである。誘致の対象となった地所は鴨川沿いの「三樹水亭」であった。推測するに、山県は目白において隣地の田中光顕と非常に親密な関係を築いており、同じ環境を京都にも再現するため、第二次無隣庵ともほど近いこの地を勧めたのであろう。山県は想像されるが如く孤独ではあったが、想像されるような孤独を愛する人間ではなかった。むしろ、その人的不器用さとは裏腹に、いやそれゆえに私的な友人を強く欲したのであった。

だが、「三樹水亭」という地所を勧めたのはなぜだったか。それは、「三樹水亭」が頼山陽の旧居であった山紫水明処の近傍にあり、東山を望んで旧事を偲ぶことができるという理由による。山県は「鴨川水楼」から田中に書き送っている。⁽⁵⁷⁾

「扱、全権を蒙候一事に付、専門家同伴実地検視を遂候処、勿論不廉と申には無之、相当之価値に有之候。然に建家は数十年を経過せし故、此俟にては兎角住居は出来不申、柱根鐘瓦之葺換等は暫時見合候ても、廁湯殿丈は新規建設不致ては不潔を極め候。其他小修繕を合せ数百円をかけ不申ては不相成と存候。寧ろ古家を解放し新一草堂を設け候ても五、六百円なれば十分に相整ひ可申との事に候。又地位は四囲佳影之中に埋没と申程には無之候得とも、三樹之旧風景は寂々寐々なから于今存し居候。二三軒下流には山陽翁之旧草廬「山紫水明処」あり。遠は叡山を望み近者黒谷に対し、緑樹雲烟之中に高塔を生し、旧時之風光は依然たり。往事を回想せらるれば、東山之風景者一眸中に生し可申と不贅候⁽⁵⁸⁾」

「三樹水亭」という地所自体も幕末維新期の会合場所として度々用いられていたようであり、この書簡の別の箇所でも山県が清岡公張の寓居であったと書いているのを見ても、山県が幕末におけるその

館の意味を知らなかったはずはない。つまり、この誘いは単なる別邸誘致ではなく、史蹟の記憶という試みでもあったのである。実際、田中も返書において、その光景を想起している。

「山紫水明之光景は欲忘不能忘候。之に就ても東山煙霧の中に御彷徨候想像仕候。山河旧の如くなるも古人の非なるには多少之御感慨遥察仕候」⁽⁶⁵⁾

こうして、維新の士たちにとっての京都別邸とは単なる別邸を超えた記憶装置でもあったことが理解される。とはいえ、山県にとってはともに語りあえてこそその記憶であり、史蹟保存が目的ではなかったから（そのことは先の三樹水亭において積極的に改築を検討していたことから明らかであろう）、前述の通り山県の無隣庵の移動が決定したことでこの別邸誘致は放棄されることになった。

だが、ひとたび山県の第三次無隣庵が完成すると、誘致は再浮上したようで、田中宛山県書簡によれば、山県は作庭など通じて親しかった伊集院兼常に田中の「京都土地」などについて相談した。⁽⁶¹⁾交渉の対象になった地所は不明だが、田中が特に「水車」にこだわっていること、⁽⁶²⁾そしてこの交渉の直前に明治天皇の大葬のために京都に滞在して、山県から無隣庵に誘われていることを考え併せると、⁽⁶³⁾無隣庵を訪問した田中が南禅寺近傍の「水車」のある地所に目を着

けたという想像はあながち突飛なものではないように思われる。この交渉は、伊集院が担当してそれなりに進行了ようだが、⁽⁶⁴⁾いかなる結末に至ったかは知るよしがない。ただ、年代は不詳だが、田中は山県に別荘の手配を頼む書簡中に「天涯之一浪生困窮之情態」を訴えるなど、⁽⁶⁵⁾その経済状況は山県と同等ではありえず、京都別邸を満足に維持することは難しかったかもしれない。

四 無隣庵の意味

大磯・小洵庵との関係性——一八九八年を中心に

では、「椿山莊主」、「小洵庵主」、「無隣庵主」といった呼称に対応した役割別の館利用の様態が存在したとして、それは具体的にどのようなものだったのか、一八九八（明治三十一）年の事例を取り上げて検討してみたい。この年頭、第二次松方内閣の瓦解を受けて、伊藤博文、井上馨、西郷従道、桂太郎らは大磯に集まっていた。⁽⁶⁶⁾よく知られているように大磯は有力政治家が別荘を構える政界の奥座敷であり、⁽⁶⁷⁾山県もまた、橋本左内の弟で後に軍医総監を務める橋本綱常から足関節炎の治療のためには「箱根の如き空氣濕潤の地」より「大磯の海岸に如くものなし」と献言されて、⁽⁶⁸⁾一八八七年頃以来そこに小洵庵と呼ばれる別邸を構えていた。

一八九八年の元日、その小洵庵で集會が持たれた。⁽⁶⁹⁾第三次伊藤内

閣の構想はここで略決されたものであろう。右に挙げられたような有力政治家たちは地方の別荘に向かう途中、ここに滞在している者が多く、山県もまた無隣庵に向かう予定であったが、訪問した桂に對しては「野生は伊藤へ十分談話をつくし同人の許可を得候上ならでは京師行は致し不申含」と回答した。山県はこの回答を伊藤にも伝えて伊藤と協調する姿勢をアピールし、伊藤はこれに應えて山県の上京を強く要請し、山県は伊藤に同行して上京することとなったのである。⁽⁷³⁾これに伴い、山県は三月までしばらく大磯で過ごさざるをえなくなっている。⁽⁷⁴⁾

この事例にも見えるように、他の有力政治家たちとのチャンネルが存在するという以外にも、必要があれば上京できるという距離が大磯を政治化しやすい場に変えていた。山県が西郷従道に宛てた次のような書簡はその距離感をよくうかがわせる。

「小生ハ今夕頃より大磯江海浴ニ罷越し可申候含ニ候略御話も仕候様御用有之節ハ電信ニ而御通知被下候ハ、直ニ帰京可仕候」⁽⁷⁵⁾

もちろん、このような特殊時を除けば、基本的には大磯は休養の地として認識されており、山県もここで海水浴を行っていた。⁽⁷⁶⁾だが、陸奥宗光が「春畝翁「伊藤博文」も当分帰磯之模様無之、四隣頗寥

寂に御坐候」と不満を述べたことに象徴されるように、大磯においては有力政治家が集っているのが珍しくなく、いつ政治化されてもおかしくないということが大磯の館の地位を変化せしめていたのである。⁽⁷⁷⁾この大磯の特殊性は、例えば一八八九年に、伊藤博文が小田原に「隠居同様」に「蟄居」せんとし、井上馨が鎌倉に隠遁することと「退職之下地」をつくろうとしたのと比較すればより明瞭になる。⁽⁸²⁾

山県の小洵庵について見ても、徳富蘇峰が「小洵庵は、伊藤、西園寺、大隈等の別墅と隣接していたので、公が小洵庵に滞在する際には、伊藤、西園寺との往来が頻繁に行はれた」と述べているように、⁽⁸³⁾また先の一八九八年の事例にも表れているように、相当程度政治化されていた。そもそも、元勲級の指導者が東京近県に別邸を設けたのは「来客の遮断、局限」がその一つの目的だったと指摘されているが、⁽⁸⁴⁾そうして設けられたはずの小洵庵にすら来客は多く、山県が大磯で休養しようと思えば「来客は謝絶」しなければならぬほどであった。⁽⁸⁵⁾

こうした状況下で大磯別邸以上に政治と隔絶して静養したいと願うなら、大磯を越えて地方に逃げ込むしか方法はなかったであろう。こうして、大磯に別邸を持つ有力政治家においては東京―大磯―地方という邸宅の階層性が成立することになったのである。逆に言えば、地方にいる限りにおいて政治との隔絶はかなり大きくなる。そ

の地方の館のなかでも京都はかなり遠隔地にあたり、当時東海道線では片道に丸一日を要し、例えば山県の場合には、東京を発つのが午後になってしまった場合には名古屋などで一泊することも多かった。これだけの時間的距離が政治上に影響を及ぼさなかったわけではない。実際、一八九五年の事例だが、田中光顕は不在中の政変を恐れて、山県が無隣庵に滞在するのを嫌ったことがあった。

「此度は至急に御帰京相成、伊藤、黒田、土方等と御申合せに而、松方を是非に御推薦相成候方得策と存申候。若し不然して御滞京〔京都のこと〕に相成候時は却而松方のために前の策〔山県推薦〕に出られ、不容易御迷惑に至り候哉も難計候。呉々も一日も早く御帰京御得策と存申候」⁽⁸⁶⁾

これは第二次伊藤内閣の政治危機の際のものであるが、翌年同内閣の崩落が現実のものになると、田中光顕のみならず土方久元宮内大臣からも重ねて帰京が要請されることになった。ちなみに、田中は、前述の通り、無隣庵滞在中の山県に対して「無隣庵主」という宛名を用いるようになっていたが、興味深いことに、この求めに際しては敢えて「山県侯」や「山県大将」という宛名を用いていることが注目される⁽⁸⁷⁾。私的な友人としての「無隣庵主」という宛名を敢えて廃することで、公的任務、まして「為皇室」という謹厳を示そ

うとしたと解するのは読み込みすぎであろうか。いずれにせよ、こうした努力にもかかわらず、山県は病を理由に上京しなかった。

このような引籠りは明らかに政治的コミュニケーションであつて、佐々木隆のまじめに従えば、山県はそれ以前にも一八九一年に伊藤博文・井上馨の政務部設置に先立つて第二無隣庵に籠り、一八九三年末にも伊藤博文内閣に対する事実上の不信任案であつた官紀振肅上奏案の枢密院審議を前にして第三次無隣庵に籠つていた⁽⁸⁸⁾。彼はその技術を一八九一年に伊藤博文が小田原の滄浪閣に籠つて首相であつた山県の貴族院議長就任要請に応えなかつた事件から学んだのかもしれない。彼はこうした経験を通して、政治的コミュニケーションの手段として無隣庵を利用することに習熟していつたのであつた。

一八九八年においても同じ技術が採用された。三月になってようやく西下した山県に対して⁽⁸⁹⁾、四月中旬には早くも芳川顕正や田中光顕から帰京を求める書簡が舞い込むようになったが、山県はなかなか東上せず、彼がようやく大磯まで戻ってきたのは八月になってからであつた。この経緯からも、京都が基本的に非政治的な場であり、そこに滞在する限り政治的活動がかなり制限されるという認識が広く共有されていたことがうかがわれよう。そして、この一八九一年と一八九八年の二度の引き出し工作を経て、山県は非政治的な地方の館に引籠ることで、単に自分の不満を表明するのみならず、政治

的権威を高める戦略にも気付いたように思われる。山県が元老の一人として中央政界で必要とされるようになってからは、彼が引籠りを決め込めば、彼が最も重要だと考えていた宮中の一大事でない限り、⁽⁹¹⁾彼が政界に不可欠だという事実を衆目に存分に披歴することができた。非政治たる場もまた政治的に利用しうるのである。

政治化？

一九〇三（明治三十六）年四月二十二日、この無隣庵の洋館で日露戦争へとつながる対ロシア政策の基本線が確認されたと言われている。このことを受けて、鈴木博之は「無隣庵は政治の場であり、小川治兵衛の庭は政治の庭でもあったのだ」と書いているが、⁽⁹²⁾無隣庵がそもそもは静養の地として生まれたことはすでに見た通りである。果たして無隣庵は政治の場になったのだろうか、その経過について見てみよう。

琵琶湖疏水との関係もあるくらいだから、無隣庵滞在中の山県が当初から地方政治との深いつながりを有していたことは事実である。京都府知事の訪問は頻繁にあつたし、そのなかには例えば「東山鉄道」の計画を芳川顕正に取り次いだりするようなこともあつた。⁽⁹³⁾だが、中央政府との関係ではその政治性は決して強くはなく、一八九六年十一月、おそらくはじめて伊藤博文が無隣庵を訪問したときにも、その滞在時間はわずか数分だったといふ。⁽⁹⁴⁾

あらゆる書簡が、無隣庵が基本的に静養の地として機能していたことを証明している。例えば、次のような品川弥二郎の書簡は、多くの政治的報告が無隣庵に届いていたことをうかがわせるが、それはあくまで報告であつて、政治的活動ではなかったものと思われる。

「松茸狩、紅葉之好時節も内外憂患之報告のみ御受け御心事何も御察申上候。何卒御養生第一と存候間、西山東山折々は北山之御遊歩も有之度奉祈候」⁽⁹⁵⁾

静養の地としての無隣庵というイメージは世間にも共有されていたようで、第二次山県内閣後の『東京朝日新聞』の社説は、政治に倦んでいるというのなら「真に無隣庵に退隠するの時なる可し」と主張したほどであつた。⁽⁹⁶⁾確かに、第二次山県内閣後、彼は無隣庵で悠悠自適の生活を送っていたように見えるが、それは寂しがりやの山県にとつてつらい日々でもあつたようである。⁽⁹⁷⁾例えば、彼はある時、勝間田稔の詩吟に次して、無隣庵を題にして「水清苔青無点塵、東山相對佳賓、朝晴暮雨世間事、了此風情誰有幾人」と詠んだのだが、⁽⁹⁸⁾自分でもそれを気に入ったようで根室の水産家・柳田藤助が訪れた際にもこの詩の近什を書して与えている。だが、その時この詩には「何ひとつ世にのぞみなき柴の戸をたゞきてもまた訪ふ人のあり」という言葉が書き加えられていたといふ。⁽⁹⁹⁾その他、この時期

には有象無象、あらゆる人物と会っている様子が記録されており、山県の寂しさをよく伝える。なかには驚くことに、一般人の邸宅を訪問していたという記述まである。

「私の親戚の宅が京は下岡崎の、山県公の無隣庵に近い所にあつて、その主人が含雪老公とも近づきの間なので、老公が政界の五月蠅さから追はれて、京都に閑居してゐる時分には、閑にまかせてちよい／＼親戚の家にも出掛けて来たものだ」⁽⁹⁾

山県がこの家の新築祝いに白椿を送り、その椿の様子を見にきていたという事情のようだが、送られた側は果たしてどんな心情であつただろうか。

もつとも、一方で政治化の傾向もなかつたわけではない。一つは、先に指摘した引き出し・引籠りの綱引きである。山県の引き出しを試みる史料は多いが、例えば、一九〇一年三月、清浦圭吾は山県引き出しの動向について伝えながら、それを駆け引きに使うことの重要性を指摘している。⁽¹⁰⁾ところが、無隣庵が非政治的な場と見られれば見られるほど、無隣庵からの上京は権力者の政治への介入という強烈な印象を与えることにもなっていたから、石黒忠恵などはそれを考慮して引籠るべきだという進言をしている。⁽¹¹⁾

「近日之世況之処え御帰京相成候は、種々牽強附会之説も涌出可致に付、可相成は尚暫く御地御静養被為在候方可然と奉愚考候。議會半ばこと片付き不申内は御養生之為御帰京被成候ても世上には別に意味あり候事に誤解流伝可仕候。世に重きを負せられ候御身はサテ／＼窮屈之ものと恐察仕候」

石黒の言う通り、これは山県の政治的影響力の拡大に伴う変化にほかならなかつたが、東京の本邸に帰ることも憚られる状況は確かに「窮屈」であつたに違いなく、また次第に政治的活動の必要性が復活しても書簡でしかこれに対応できないなど、「窮屈」の度合いはますます亢進するようになったものと思われる。例えば、次の田中光顕の書簡は、河野忠三の貴族院議員転身希望への対応をめぐるものだが、無隣庵が未だに基本的には非政治的な場所で、それがゆえに書簡での対応が煩瑣になつている様子をうかがわせる。

「特別に首相へ御一通に而も御遣し被下候歟、又は御帰京之上親敷御以来被下候様之儀も相叶候は、成功にも至り可申存候間、御静養中御うるさき事とは存候へとも願上候」⁽¹²⁾

一方、無隣庵会議などの無隣庵における会合に象徴される、無隣庵自体の政治的利用もわずかずつだが進んだ。例えば、一九〇二年

十一月の新聞は、伊藤が山県を訪問して密談・午餐して、桂も立寄るはずであったが都合により実現しなかったことを報じている。⁽⁹⁵⁾ 無隣庵会議はまさにこの流れのなかで行われたものにほかならなかった。これらの密談は無隣庵の洋館で行われ、無隣庵の政治的地位が失われてからも京都滞在中の西園寺と行われることもあったようである。⁽⁹⁶⁾

無隣庵の政治化如何について結論を出すすれば、確かに無隣庵における会合はわずかに増加したが、それは山県をわざわざ無隣庵に留め置くほどの政治的意味を持ったものとは言えず、無隣庵が政治の場になったとまで言うことはできないだろう。だが、山県の無隣庵滞在が周囲の政治的予測を乱反射させるようになったという意味で、無隣庵はもはや純粋な非政治の館ではありえなくなっていた。その上、山県としては無隣庵滞在は寂しくもあつたから、山県が無隣庵を主たる館として維持することの意義は次第に薄れていったと言えるだろう。

五 無隣庵から古稀庵へ

古稀庵の成立

古稀庵の建造は、すでに見たような東京―大磯―地方という階層性を根本から変えるものであつた。鈴木博之の分類では、古稀庵は

小洵庵を継ぐ湘南別邸と位置付けられているが、小洵庵の役割が「政界の奥座敷」の大磯という特殊な磁場によって規定されていた以上、小田原につくられた古稀庵が同じ役割を期待されるはずも、また担えるはずもなかったのである。実際、古稀庵のある小田原・板橋は「湘南」と位置付けられることもあつたが、同時に「函麓」(箱根)と位置付けられることが多かった。⁽⁹⁷⁾

古稀庵の役割は疑いなく本邸である。つまり、この時期には椿山荘から古稀庵へと本邸の移動が起こつたのであり、小洵庵の消滅と無隣庵の地位の下降を考え併せるなら、階層的な役割別邸宅利用はほぼ一極集中することになったのである。古稀庵建造後もかつての本邸たる椿山荘は維持されたが、その利用頻度は目に見えて減つており、椿山荘を継いだ新椿山荘はもはや「東京別邸」という程度の役割しか与えることはできない。

だが、なぜこんな変化が生じることになったのか。ここでは特に無隣庵から古稀庵への移行という観点から考えてみたい。⁽⁹⁸⁾ そもそも、静養の地を選ぶにあたって健康は最も重要な部分の一つであろうが、小洵庵と無隣庵とは微妙な関係にあつたようである。ある新聞は夏の休暇について「実験上大磯より京都の空気首相「山県」の身体に適する」⁽⁹⁹⁾ ためとして山県の無隣庵行を報じたことがあつた。ところが、一方で冬の静養については山県自身が医者⁽¹⁰⁰⁾の勧告によつて大磯に滞在していることを証言してもいる。山県が京都の秋を特に愛し

たことは疑いないが、⁽¹¹⁾ 齢を重ねて健康の重みが大きくなってきたとき、長時間の移動なしに体に合った気候で静養できる、新たな館を得ることは喫緊の課題となっていた。

では、それがなぜ小田原・板橋だったのか。その転機になったと見られる山県と田中光顕との往復書簡があるから、まずそれを見てみたい。転機は「無隣庵主公」に宛てて書かれた田中光顕書簡。

「橋本国手之談に拠れば、閣下京都之風光御愛しに相成候得共、冬季は寒冷甚敷き為め、且は池水の為め御健康上には十分に無之に付、今少し温暖之地に御移り相成度ものとの事に有之、至極尤の説とは承り候得共、何分塵界之煩雜を御避け相成候には大磯も鎌倉も東京に近くして御静養は所詮出来申間布不被為得已候次第と相考申候に付、強而御勧めは不申上候得共、御一考被為成候而は如何哉と奉存候」⁽¹²⁾

「老生避寒之事に付橋本国手之勧告最も至極に候。如貴諭大磯、鎌倉辺は煩雜を極め到底静養の地には無之実に御同感に候」⁽¹³⁾

橋本国手とは、山県に大磯における療治を勧めた橋本綱常のことである。山県は、その主治医の一人であった橋本の意見を再び参考にして、健康上の理由から、新たな別荘を求めたものと思われる。⁽¹⁴⁾

具体的な過程は不明ではあるが、茶などを通じて山県と親しかった三井財閥の中心人物・益田孝（鈍翁）が古稀庵の地所確保などに協力したことはすでに明らかにされている。益田が少し早い時期に、古稀庵の隣地に掃雲台を構えていることを考えても、彼らの密接な関係は明らかである。いずれにせよ、ここで重要なのは、山県にとって古稀庵はそもそも非政治の空間として構想されたということである。

その意味において初期には、政治の場としての大磯とも明確な差別化が図られていた。

「〔東京からの〕帰途大磯にて可致面晤存居候処、既に御帰京之趣拝承遺憾に存候。老生も過日来函山に静養日々青山淡水之間逍遙罷在候。併し両三日中には小洵庵に向ひ可申含に候」⁽¹⁵⁾

つまり、古稀庵に期待されていたのは、無隣庵を継ぐ地方の静養の館であり、東京―大磯―地方という階層性はなお維持される予定だった。ところが、山県にとって誤算だったのは、彼の政治的影響力が想定以上に大きく、予想を超える数の客が古稀庵まではるばる足を運んだことだった。

「不便の地も早春旁来訪者不絶、意外之感を生し申候。去なか

ら此節よりは煙水伴鷗可申と相樂居申候」¹⁵

もつともこの時点では、いくら来訪客が多いとはいっても、その数は椿山荘への客ほどではなかったから、本邸としての椿山荘と静養の地としての古稀庵との役割の区別はなお維持されていた。であるからこそ、古稀庵完成後、山県が上京してもすぐに古稀庵に帰るようになって、有力政治家たちは短い上京を狙って椿山荘を訪問しようとしたのである。

「大正元年「一九一二年」十二月十七日桂首相目白椿山荘に来訪す。蓋し余は其の翌日を以て小田原古稀庵に趣かんとするか故なり。桂「……」曰く、「……」暫らくは御淋しからむも幸に心を安し別業に起臥して静養せられむことを請ふと。余其の厚意を謝して之を諾す」¹⁷

これは桂・山県双方が、古稀庵を静養の地と認識していたことを示すものにほかならない。ところが、次第に古稀庵に籠もる時間が長くなった山県に対して、外側からは「山県閣」と認識されることになる政治家・官僚の一群は、自身の利益に山県から正統性を調達するため、東海道を下って小田原参りを行うようになった。毎年椿山荘で盛大に行われていた誕生会に関する次のような田中宛山県書

簡の記述は、失墜した田中光顕への気遣いもあるかもしれないけれど、やはり「山県閣」における山県の受動的な態度を示すものであろう。

「実ハ先帝崩御後ハ遁世之心事故誕辰日も廃止可致与存候処後輩之友人等より在世中ハ不可然与の議論差起り旧ニ依り如旧開宴致し候」¹⁸

特に一九一三（大正二）年頃から、それまでは山県の上京を待つたり電報に頼ったりしていた渡辺千秋宮相が古稀庵を訪問するようになったことは、元老を別とすれば、ほとんどの有力者を古稀庵に引き寄せることが可能になったことを意味した。¹⁹ 佐々木隆は元老の別荘居住について、「現役の有力政治家——時としては首相——が自ら足を運ぶという事実はそのまま別格の存在として地位を証明するものであり、元老の別荘居住はこの意味で彼らの栄光を体現していた」²⁰と書いたが、山県においての古稀庵もまた、そのような権力装置としての完成をみるようになった。

椿山荘の消滅——新椿山荘の成立

このことは同時に本邸であった椿山荘の非政治化を意味する。例えば、二宮熊次郎が次のような詩を詠んでいるのは象徴的である。

「椿山莊即事」

山風習々松銀屏 修竹老松陰滿庭

世上炎塵飛不到 涼蟬聲裡夕陽盛⁽¹²⁾

こうして、本邸の意義は小さくなり、一九一七（大正六）年十一月には椿山莊は番町の新椿山莊へと移行することになった。⁽¹³⁾なぜ新椿山莊にこの土地が選ばれたのかについて、『公爵山県有朋伝』は「小田原の古稀庵を常住の居と定めたが、折々上京の際、宿所無かるべからずとて、三十年来、公の所有であつた麴町区五番町の邸宅」云々と書いている。⁽¹⁴⁾単にすでに館があつたばかりではない。曾禰達蔵によれば、それはおそらく日本で初めてのコンペ建築で、かつ片山東熊の処女作だというのである。すなわち曾禰は、一九七九（明治十二）年頃の話として次のような話を遺している。

「私共工部大学校の第一期建築科学生が卒業する少し前の或る頃に、山県有朋さんが其時麴町区五番町の邸内に自分の住宅を新築せんと企てられた、『……』其建築の設計を山県さんは片山君を通じて辰野「金吾」、片山「東熊」、佐立「七次郎」、（宮伝次郎と云ふ学生も存命であつてこれに加はつたか不明）の三君と余の四学生に立案するやう申越された。まあコンペションの試験です、勿論良いのがあつたら採用するからと云ふのでやら

された、偕どうして山県さんにそんなことを頼まれたかと云ふと、片山君と山県有朋さんとは山口県の而も萩の同郷人で片山君の実兄が陸軍将校でもあり、それこれで殊に親しかつた山県さんは片山お前に頼んで宜いのだけれども、まあみんなにもやらせて見る位のことであつたかも知れませぬし或は片山君が強いて山県さんを説いて斯くさせたかも知れませんが、兎に角さう云ふことになつて一生懸命にやつて、プランとエレヴェーションとセクシオンを百分の一の縮尺にして略図案を作り上げました、而して案も良かった「の」でせう、結局片山君に行つてしまつて実現したのですが、実に片山君の処女作でありました。」⁽¹⁵⁾あの木造の家が長い間ございましたが、いつしか農商務省か何かの官邸になつたやうでした⁽¹⁶⁾

農商務省の官邸になつたかどうか、今俄に確認できないが、山県が実際に利用していないことに鑑みればおそらく事実であろう。ただし、その五番町に舞い戻つてくるためにはその土地を所有し続けなければならぬ。そこでずつと理解しかねていたのは、『公爵山県有朋伝』の「三十年來」という記述にもかかわらず、一八八八年時点の「財産取調書」にはこの土地の記載がないことである。⁽¹⁷⁾そこで、この伝記の記述が正確なのではないかと考えていたのだが、最近、年不明であつた田中宛山県書簡の「五番丁家之事は遺言書中、

京師木屋町別邸之如く可致存候処、多忙にて別に書記候時間無之に付⁽¹²⁷⁾」という記述が遺産相続の参考のために書かれた「財産取調書」を補填するものである可能性に気が付いた。もしそうであるとすれば、やはり伝記の記述は正しく、新椿山荘はずっと山県の所有だったのである。ただし、この書簡を一八八八年のものと年代推定した場合、それは第二次無隣庵の成立時期に飛び火する。すでに一八八九年四月時点まで第二次無隣庵の成立が遡ることを指摘したが、先の年代推定を生かすなら「京師木屋町別邸」は一八八八年十一月時点にはすでに成立していたことになるからである。筆者の見解としては、やはり新椿山荘の土地は以前から山県の所有に属していたと考えるべきであり、第二次無隣庵の成立は一八八八年以前まで遡るべきだと考える⁽¹²⁸⁾。

さて、再び新椿山荘についてだが、この土地をめぐる謎は地所の選定ばかりではない。注目したいのは、一九一六年、すなわち新椿山荘造営の一年前に大島健一陸軍大臣が山県に書き送った次の書簡である。

「番町官舎之件に付米村副官へ御伝言拝承仕候。併官舎之方は相当之余地有之候事故、今後御進行之御都合に依り更に御入用生し候は、御申し付可被下候⁽¹²⁹⁾」

ここにある「番町官舎」とは何であろうか。調べてみると山県の新椿山荘の住所は麹町区五番町一四なのだが、隣地の五番町一三が陸軍次官官舎である。ここで言及されている「番町官舎」とはこの次官官舎のことではあるまいか。山県は椿山荘においても、無隣庵においても、また古稀庵においても、築庭に伴って土地を増やすことがあったが、確かに新椿山荘についても西隣に二百余坪、北隣に「百余坪を拡張しており、ここで指示されているのは隣地の次官官舎からの敷地の融通だったのではないかと想像されるのである。山県自身が「先般新椿山移転後ハ知友会合之場処も無之」と書いているように、新椿山荘は使用面ではそこまで政治的な意義を持たなかったが、無隣庵や古稀庵においてもそうだったように、その土地の取得の経緯という側面では相当の政治性を秘めていたのである。

古稀庵に宿る政治性

さて、古稀庵に戻ろう。古稀庵はそれまで複数の館によつて分掌されてきた政治性とはまったく異なる政治性を完成させたわけだが、それではその政治性とはいかなるものだったのだろうか。東京から日帰りできるという絶妙な時間的距離に支えられて、小田原参りが生じたことはすでに述べた通りだが、いくら山県からの正統性を欲しても、有力政治家や高級官僚にとって、一日をかけて東京から遠路出かけ、小田原から古稀庵まで山肌を登るといふ行為は、無駄で

あるばかりではなく屈辱的にすら映る。それにもかかわらず、彼らが古稀庵に引き寄せられたのは、山県と会うということ自体に特権の意味が与えられていたからにはかならない。ある報道によれば来客のうち面会できるのは一割程度で、ほとんどは面会謝絶だったという。¹³² 清浦や芳川といった近い関係の有力者であれば事前連絡なしで面会することが可能だったようだが、次官クラスでも事前連絡の段階で断られることもあつたくらいで、いわば会うかどうかということ自体に権力性が宿っており、古稀庵を政治的たらしめる一因となっていたのである。

加えて、こうして中央政界の人々を引きつけるほどの時間的距離でありながら、高齢になった山県はほとんど上京しなかったために、古稀庵においては無隣庵におけるのと同様の引籠り効果を演出することが可能であつたことも重要である。これが上京を要請されて断ることが困難な大磯との違いでもある。¹³⁴ 例えば、原敬は次のような山県の戦略を記録している。

「後藤新平と会見せしに、同人の云ふ所によれば兼て聞けう通り山県が小田原「古稀庵」に帰りたるは清国問題根本的に解決するの意見書を其筋に送りて帰りたるものにて、多分政府より招かざれば帰京せざるべしと云ふ」¹³⁵

この山県の戦術が、あまりに象徴的にとられるようになったために、伊東巳代治はこれを「山県式」と呼びさえた。

「伊東巳代治が」山県は上京せば必ず之「内閣辞職」を処置するらしと云ふに付、余「原敬」は辞職は上京せずしてもなさしめ得ざるにあらずやと云ひたれば、伊東はそこは山県式なり必ず親しく参内奏上の積ならんと云へり」¹³⁶

かくの如く、古稀庵からの時間的距離が重要であつたということ、いかに古稀庵周辺の地所が重要であつたかを物語つてもいる。益田孝の掃雲台のほか、一九一四（大正三）年には山県の手に渡ることになる清浦圭吾の皆春荘など関係者の邸宅は周囲に多かった。古稀庵と益田の掃雲台とが一本の細い道でつながっていたほか、記者たちの目を避けるために大島義昌の別荘を通して人を上げるといったエピソードも語られるなど、これらの邸宅は一種のコロニーを形成しており、山県はこれらの館を勝手気ままに散歩していたようである。

それゆえに、そのコロニーに綻びが生じることは避けなければならなかった。それがよくうかがわれるのは、やはり山県と深い関係を持ち、隣地に邸宅を有していたやまと新聞の松下軍治の館をめぐる一件である。一九〇九（明治四十二）年、経済的苦境に陥った松

下は新聞社売却か小田原別荘売却かという二択を迫られたが、この時山県らは松下救助に奔走している⁽¹⁷⁾。

これにより、一度は救われた松下邸であったが、一九一五年、松下が没すると、その館の行方は再び問題となり、やはり山県と近い安広伴一郎は当時の船成金の一人だった山下亀三郎に館の買取りを持ち掛けた⁽¹⁸⁾。第一次大戦下の好況のなかでも儉約を強調していた山県にとつて、山下が話の合う相手だったとはとても思えないが、山下の回想によれば十五万円程度にものぼったという費用を工面できる人物は他になかなか見つからなかったであろう。山下はこのつながりを通じてあらゆる政客との知己を得ることに成功して、この邸宅の効用を得たが、山下の家の築庭を担当することになった山県の方も幸福だったものと思われる。結果として、山県は山下の館に「対潮閣」という名を与えるなど、山下と良好な関係を築き、コロニーは平和に維持されたのである。

親密圏とも称すべき空間への闖入に対するこうした警戒は、邸内においてより強く発現したかもしれない。一九〇九年に建造された古稀庵の洋館（現在は那須の山県有朋記念館に移築されている）は伊東忠太の設計であるが、伊東忠太は当時東京帝国大学教授としてすでに名を成した建築家ではありながら、同時にいわゆる「山県閥」の中心人物たる平田東助の甥でもある。五番町の邸宅におけるコンベ実施の経緯を鑑みても、伊東への委嘱に人脈上のつながりがな

かったわけではない。こうして、山県は箱根のふもとに——空間的にも政治的にも機能する——自分の城を築き上げたのだった。

六 権力の館の使い方——無隣庵を中心に

無隣の作成

ここまで基本的には地理的な条件を中心に山県の館について見てきたが、それぞれがいかに使われたかについても見ておきたい。無隣庵がそもそも静養の地として構想されながら政治化されたことは既述した通りだが、では、建築としては変わらない邸宅が違う意味を付与されたとき、その使われ方はいかに変わっているのだろうか。それが、本節の課題である。

古稀庵を静養の地にするためにまず喧噪からの逃避が挙げられたように、無隣庵においても「無隣」であることは重要であった。ところが、その地はそもそも南禅寺の門前に存在している上に、琵琶湖疏水完成によつて周囲に水力発電所など最新の施設や、疏水の水を利用する別邸が立ち並ぶようになる。無隣庵の敷地はそれらに囲まれて喧噪から離れた地というわけにはいかなかったのである。ところが、その周辺環境に敢えて「無隣」を作成しえたところが山県の築庭の面目躍如だろう。広間から庭を一望したとき、樅のような高木や高い塀といった装置は外界を遮断し、しかしその庭は後景た

る東山と連続して、瀑布の水は東山から流れ込むが如くのものである。⁽¹³⁹⁾ こうすることで、庭は敷地のはるか遠くまで広がってゆき、邸宅には「無隣」が作成されるのだ。この山県構想は、はじめ「こんな狭苦しいところを無隣庵など云ふのは、一体どう云ふわけだろう」と考えていた大隈重信をも感嘆させた。⁽¹⁴⁰⁾

このように借景を利用するのは古稀庵にも見られる特徴だが、ここでは椿山荘にも見られる館を外界から切断するという手法に注目したい。この点に注目するならば、無隣庵のなかで外界との切断を具現している建築は、鈴木が「防御的な建物」と呼んだ洋館である。厚い壁により閉ざされたこの蔵のような洋館は、美学的な欠陥のために触れられることが少ないが、無隣庵会議の舞台となった建築でもあり、空間と政治の関係について考察する上では避けては通れないように思われる。以下、この洋館の使われ方を通して山県の館の使い方を観察してみよう。

窓の開く洋館

現在の洋館は、厚い壁に小さい窓といった構成で、確かに「防御的」には見えるけれど、この見方は本当に正しいのだろうか。例えば、高橋箒庵が「西洋館ハ老公ノ防寒室トモ云フベキモノデアル」⁽¹⁴¹⁾と証言しているのを見ると、その閉鎖的な空間構成はむしろ寒さへの対策として認識されていたようである。このように視点を変

えるならば、洋館のもう一つの特徴として注目されるのは暗闇のなかに浮かび上がるきらびやかな金碧花鳥図障壁画である。この壁紙の由来については、次の児玉少介の書簡が伝えてくれる。

「洋形之御坐敷拝見、誠に大丈夫に而楼上之壁画誠に驚入候ものには有之、尋常之所に可有之品に無之と存候処、果して古城中之剥物之由、下の間之貼紙之儀御下名に付越智と申合、小生の考に上の間は立派を極めたる貼付に付、次之間（天井の寄木も白く）銀の粉砂子え金砂子の雑せ張りは室内も明かに相成と存候。誠に適当と越智も大賛成に御坐候。若印刷局金模様様の御張紙に而も相成候は、配置大不都合かと心付之儘申上候」⁽¹⁴²⁾

すなわち、古城にあつたものを剥がしてきたのである。別の場所では、児玉はそれが津城にあつた狩野探幽筆蹟のものだつたと書いている。⁽¹⁴³⁾ 鈴木博之は無隣庵の庭の石に伽藍石とおぼしきつくり出しの施された石が据えられていることに注意を促して、当時の貴顕紳士の邸宅には歴史的に重要な礎石さえも据えられることがあつたと指摘しているが、⁽¹⁴⁴⁾ 無隣庵洋館の壁紙にもまた、由緒正しいものを接合することで権威を高めようとする態度がうかがわれるのである。ちなみに、山県は椿山荘に高橋箒庵（義雄）から法隆寺礎石と同種類という洗手石を受け取つたことがあり、⁽¹⁴⁵⁾ 壁紙のみならず

石についても鈴木の推測が当たっている可能性は相当高い⁽¹⁴⁶⁾。

さて、先の児玉少介書簡の注目すべきもう一点は、当時においてもこの建築は室内が暗いという印象を与えていたということである。では、やはり、この館は「防御的な建物」だったのであろうか。洋館に入った人物の記述は少なく、現実にとのように利用されていたか示す史料はほとんどないが、それでも左の記述はこの館の違った側面を垣間見せる。

「無隣庵の洋館楼上三十六峯の翠色欄に落ちて涼味掬すべき邊り主人の侯爵ハ白地の単衣に仙台平の古袴を穿ち徐ろにソーフワーに倚りシガーを噴かせつゝ温平たる笑を洩して語る所諄々止むなく心ならずも侯爵静養の安を妨げたり」⁽¹⁴⁷⁾ ▲無隣庵に閑臥して山紫水明の風光を愛づるハ予が老後の樂境で暑中の温度の如き別に目白の椿山莊と変りなきも矢張り懐かしいのハ斯の無隣庵である、庵の経営にハ石の配置、植木の植附、屋宇の構造等につき庭師や大工と色々議論などした事もあつた⁽¹⁴⁸⁾」

以上の記述は、洋館が密議のための場であつたばかりではなく、窓を開けて風景を眺める場としても活用されていたことを示すものである。窓の開かれた洋館を想像するならば、その内部の暗さはやはり「防御的」といった見方で終始するべきではなく、むしろ外側

の風景との対比によつて把握されるべきなのではないだろうか。つまり、暗くて閉鎖的な空間は、主人たる山県が窓を開け放つことで美しい景色を導き入れる。まるで非政治の館が政治的に利用されえたように、暗い空間だからこそ明るい外景を際立たせることができたのである。

主客関係——茶室から

暗く閉鎖的な空間からの解放という主題は、実際のところ無隣庵茶室にも見出すことができる。黒田天外はその無隣庵訪問において山県に茶室に案内された際、利休が祀られていたのが取り払われて「西手勾欄のつきたる椽端」が設置され、そこに出て比叡山を眺めるようになったと記録している⁽¹⁴⁹⁾。この記述は利休との関係から象徴的に読まれることが多いが、主人の指示によつて闇と光、閉鎖と開放という対比を生み出さうる政治技術の装置として読むこともできるのではなからうか。

このように読み直しを図るとき、次のような逸話も検討の対象にならなければならない。

「明治二十九年〔一八九六年〕、公が無隣庵を経営したときに、公は其の庭隅に、三疊台目の茶席を造り、京都の松岡嘉兵衛を招いて、点茶手前を稽古し、又た茶客を招くに必要なる道具を

取揃へ、自ら主人と為つて、茶人伊集院兼常、望月宗匠を呼んだことがある。然るに、彼等茶人は、公の使用した簡素なる道具に嫌たらず、席上徒に他家の名器奇什を品評するのみであつたので、公は頗る感ずる所あり、『茶道は名器あつてこそ茶客を悦ばしむれ。我等如きでは、到底屢々之を催すに堪へない』と。爾来自ら茶会を催したことは無かつた⁽¹⁰⁾

この逸話について、鈴木博之は古器物中心の茶道ではなく感覚や才能を表現するものとしての作庭という山県の傾向を示すものと解釈し、尼崎博正らは、先の利休軽視と併せて、名物志向の抹茶ではなく煎茶への傾向を示すものと解釈している⁽¹¹⁾。これらの解釈はその通りであろうが、この逸話は同時に、山県がいかに主客逆転を嫌っていたかをもよく示している。当然ではあるが、茶会にせよ、それ以外の場にせよ、「呼ぶ」という行為はそれ自体権力的な行為である。だが、それが権力的であるのは、呼んだ「客」に対して権力を一方的に顯示できるからにはかならない。自らの館を誇ることができず、逆に「客」に館や庭についての蘊蓄を傾けられてしまうようなことなどがあつては、「呼ぶ」という行為は自虐的ですからある。そんなとき、自らの館のなかで操作をするということは自らが「主」であるということを明示することであり、主格逆転を防止することでもある⁽¹²⁾。

この解釈は、山県にとつての邸宅が主客を固定する役割を果たしたという見方を導く。先に見た通り、山県はその洋館や茶室においては闇と光、閉鎖と開放という二項対立を操作できる存在になつた。また、彼がその庭園を案内し、それぞれの石や恩賜の松についてその由来を語るとき、やはり彼は紛うことなき「主」であつた。古稀庵に関するいくつかの回想は、その応接室たる洋室が「奥」に存在していたことを強調しているが、それもまた彼の権力性を強調する役割を果たしたかもしれない。このように、山県はその邸宅に手をかけて操作性を担保することで、「客」が決して「主」に転化することのない、彼が現前と「主」たりえる政治的空間を築き上げたと言えるのではないか。

七 おわりに

簡単に整理しよう。政治家としての山県有朋とその館は、相互に影響を与え合いながらお互いをかたちづくつていった。その流れは綿々と連続したものではあつたが、特に画期を設けるならば第三次無隣庵成立（とりあえず居住が可能になつた一八九五年十月頃）と古稀庵の活性化（一九一三年頃）を挙げるべきであろうと思う。第三次無隣庵成立以前の山県は、政府出仕時には官舎を利用して椿山荘を「山荘」としていたが、それでもそのイメージは次第に「芽城」

という土地に収斂するようになっていた。ところが、大磯が伊藤博文を中心に政治化され、維新を懐古する場所としての第三次無隣庵が成立すると、山県の所有する邸宅のなかに（他の有力政治家と同じく）東京―大磯―地方という階層性が成立した。これから、「椿山荘」「小洵庵」「無隣庵」といったような邸宅の名前によるイメージが定着するようになるが、これはそれぞれの邸宅が政治的意味を持つていることの表れでもあった。つまり、無隣庵においては静養の地というイメージが一般化されていたのである。

ところが、その無隣庵においてすら、主客の逆転を許さないという政治的装置が準備されており、その政治的装置のもと無隣庵会議開催などの政治化はわずかではあっても進行し、逆に非政治の場であるというイメージを利用して引籠るという政治的戦術もとられた。ここには、静養の地として選ばれたはずの古稀庵が政治技術の結晶となる下地がすでに用意されていたのである。実際、山県の政治的地位の上昇により古稀庵が意外な来客を集め、その面会の選抜が権力装置として満足に機能すると、椿山荘の地位は急落することになった。山県の邸宅群の役割別邸宅利用は古稀庵の一極集中へと転化したのである。ここにおいて、山県の政治的空間利用はその極致に達し、彼の上京は在京政治家たちを震撼させるまでに至ったのであった。

この古稀庵の空間効果の絶頂を準備したのは山県の政治的影響力

拡大であつたが、同時にこの館が山県の政治的影響力を拡大したという側面もあつて、政治家個人とその館が相互にどれだけ影響を及ぼし合っているかを測定することは容易ではない。だが、十分な政治技術が傾けられれば、権力者と空間はそれなりの影響を及ぼし合うということ、また権力者の館が政治的機能を果たすにあたってはそこに付着しているイメージが介在することなど、権力者とその館との相互連関のメカニズムについて本稿はある程度を明らかにした。また本稿では、山県が主客逆転を嫌うがゆえに主人の操作可能性の高い館をつくった可能性も指摘したが、これは異なる政治感覚を持つ権力者においては異なる邸宅のかたち（例えば、主客が明確にならず、仲間をどんどん取り込むような館の型式）が構想される可能性をも示唆するものであり、この枠組みを利用すれば、いずれ、権力者の政治感覚をその空間によつて類型化することすら可能であるかもしれない。

一方、本稿には多くの限界がある。蓋し、権力者の館に限らず、政治的空間について考察するにあたってはいくつかの空間レベルが弁別されるべきだろう。ここで便宜的に三つに集約すれば、地理レベル（都市空間やそれ以上の広がり）、建築レベル（建築平面の構成やその周辺）、建築内部レベル（建築内部における空間構成¹⁵⁴）とでも表現できるようなレベルである。この三層を前提とすると、本稿は、史料的な制約もあつて、主として地理レベル、また無隣庵洋館に注

目して建築内部レベルを扱うに留まり、建築レベルについての議論が不足していると言わざるをえないから、本稿の枠組みをそのまま権力者の館一般の分析に拡張することはできない。加えて、より多くの山県関係書簡や書類を網羅的に調査することで、山県の邸宅についての実証性を高める余地も未だ残っている。

そもそも、空間のありように興味関心のあった山県という特異な政治的人間を取り上げた時点で、安易な一般化は「死の跳躍」であろう。だが、本稿が提示した山県有朋を事例とする権力者の館の分析枠組みは、邸宅の利用や政治的位置付けなどの一つの基準を提示できたものと信じる。これまでも佐々木隆が権力者による館の政治的利用の可能性を指摘し、御厨貴が権力者の館の政治的ありようについて多角的な視座を提供したが、いかなる統一的分析枠組みによつてどのような空間―政治関係を抽出するのかについて、明確な枠組みが提示されてきたとはいえない。これに対して、本稿は（地理レベル、使用レベル双方において）館の利用の形態と館の政治的イメージを結びつけることで、空間と政治に相互の影響関係があることを示し、その影響関係が権力者の政治感覚をも観察する手立てになる可能性を指摘した。他の元老政治家たちではどうだったのだろうか。政党政治家ではどうだったのだろうか。戦後の政治家ではどうか。経済人など他の権力者ではどうか。また、本稿では扱うことができなかった建築レベルにおける権力者と空間との関係はどのよ

うに抽出できるだろうか。本稿は、沃土への小さな一歩に過ぎない。

注

- (1) 「権力者の館」という枠組みは、御厨貴『権力の館を歩く』毎日新聞出版社（二〇一〇年）において提示されたものである。
- (2) 山県の評伝としては岡義武『山県有朋』岩波書店（一九五八年、『岡義武著作集 第五巻』岩波書店、一九九三年に再録）が未だに最もまとまり、最も影響力のあるものである。近年の評伝としては伊藤之雄『山県有朋』文藝春秋（二〇〇九年）がある。
- (3) 近年の再評価については、伊藤隆『近代日本における山県有朋の位置付け―序にかえて』同編『山県有朋と近代日本』吉川弘文館（二〇〇八年）、また英語圏における再評価についてジョージ・アキタ『近代日本史研究と山県有朋』尚友倶楽部山県有朋関係文書編纂委員会編『山県有朋関係文書第三巻』尚友倶楽部（二〇〇七年）。
- (4) 藤森照信『文春文庫版解説』鈴木博之『東京の地霊』筑摩書房（二〇〇九年）。この著の初出は一九九〇年、文春文庫版は一九九八年刊行。
- (5) なお、無隣庵はよく「無鄰庵」や「無鄰菴」と表記されるが、管見の限りこれらの表記の差異に有意な意味の差異を発見できないため、本稿ではこれを無隣庵に統一した。
- (6) 井上通泰門下の森銃三は、山県が井上に弟子入りする際には政治問題には一切触れないことを約束したにもかかわらず、やがて井上が「政治上の相談相手」になったと書いている（森銃三『山県有朋・森嶋外・井上通泰』『明治人物閑話』中央公論新社（二〇〇七年、初出は一九八二年）。なお、高橋義雄の記録から山県の文化的人脈を扱ったものとして内藤一成『もうひとつの山県人脈』（伊藤隆編『山県有朋と近代日本』吉川弘文館、

(二〇〇八年)がある。

- (7) なお、井上馨や西園寺公望らが利用した興津に注目した研究として土屋和男「近代和風住宅を通じた景勝地の形成に関する史的研究」(<http://hinomirock3.net/suchiyaabo/4/index.html>) 最終アクセス：二〇一五年一月二十七日一七：〇〇)がある。本稿では、一つの土地ではなくむしろ人の側に注目する。

- (8) 古稀庵記録保存調査団・鈴木博之『山縣有朋旧邸小田原古稀庵調査報告書』千代田火災海上保険会社(一九八二年)。

- (9) 野村勘治『旅に出たら寄つてみたい庭』30『小学館(一九七七年)』鈴木誠・栗野隆・井之川若奈「山縣有朋の庭園観と椿山荘」『ランドスケープ研究』六十八巻四号(二〇〇五年)、渡邊美保子「山縣有朋の自然観と作庭観」『日本庭園学会誌』二十七号(二〇一三年)。鈴木・栗野・井之川論文は、椿山荘庭園への訪問記などの記述をまとめて紹介しており便利である。

- (10) 例えば、青木周蔵は一九〇三年、自身たちも節儉のため那須野へ転地する予定であるとして、山県にも盛暑においては清涼な伊佐野(山県農場)の方が身体に適すと転地を勧めたが、山県はこれを受けなかった(一九〇三年七月二十九日、山県宛青木周蔵書簡(18)参照)。なお、山県宛書簡については、特に記述のない限り、カッコ内はいずれも後掲『山県有朋関係文書』内の差出人別文書番号を指す。なお、書簡の引用においては、消印によって年代推定ができる場合にはカッコをつけずに表示し、筆者による年代推定の場合には「」によって示した。

- (11) 尚友倶楽部山県有朋関係文書編纂委員会編『山県有朋関係文書 第一、三巻』尚友倶楽部(二〇〇四〜二〇〇七年)。

- (12) 安岡昭男・長井純市「田中光顕関係文書紹介(一〜一三統)」『法政大学文学部紀要』五十二〜六十五号(二〇〇六〜二〇一二年)。その一部は山県伝の史料として再録され、国会図書館憲政資料室の山県有朋関係文書中に収められている。

- (13) 書簡の宛名の重要性については、佐々木隆の一連の研究がある(『近代私文書論覚え書』『年報近代日本研究』十二号、一九九〇年、「近代私文書論序説」『日本歴史』六二八号、二〇〇〇年)。

- (14) 徳富蘇峰編述『公爵山県有朋伝』中巻(一九六九年、初版は一九三三年)五七頁。

- (15) 山県は一八八八(明治二十一年)年、欧州調査に向かうにあたって田中光顕に不慮の場合のために財産取調書を託したことがあったが、そこには「麻布富士見丁に家屋敷有之伊三郎名義之分地券は預り置有之」とあって、この富士見町の土地が養子の伊三郎の名義で残されたことがうかがわれる(一八八八年十一月十一日、田中光顕宛山県有朋書簡(152)。田中光顕宛山県書簡について、カッコ内はいずれも「田中光顕関係文書」の山県書簡番号を指す。五番町の館については後述する)。

- (16) 例えば、一八六八年閏四月二十日、山県宛差出人不明書簡(補遺5)、一八七一年一月、山県宛品川弥二郎書簡(補遺1)、一八七八年九月三十日、山県宛伊藤博文書簡(23)。

- (17) 日時不明、田中宛山県書簡(251)。

- (18) 明治年間、四月十七日、田中宛山県書簡(172)。「昨日の山県邸」『東京朝日新聞』一八九八年十一月七日。

- (19) もちろん、一部の政治的活動は椿山荘においても行われていたようである。例えば、府県制草案のための小会議を「目白草廬」で行っていたという記録が残っている(年不明、七月二十四日、黒田清隆宛山県書簡、国立国会図書館憲政資料室所蔵『公爵山県有朋伝編纂資料』所収)。

- (20) 明治年間、三月十四日、田中宛山県書簡(20)。

- (21) 明治年間、一月二十四日、田中宛山県書簡(318)。

- (22) 例えば、明治年間、七月三日、田中宛山県書簡(22)、年不明、三月十二日、田中宛山県書簡(122)。

- (23) 明治年間、七月二十九日、田中宛山県書簡(199)、年不明、八月二日、田

中宛山県書簡(21)。

- (24) 「二八九七」年二月十五日、田中宛山県書簡(156)、一八九七年八月二十日、山県宛田中書簡(27)、一八九七年九月五日、山県宛田中書簡(28)。田中は、山県の外遊中には小湊庵の利用も許されていた。

(25) 明治年間、十月二十九日、田中宛山県書簡(89)。

(26) 明治年間、六月十一日、田中宛山県書簡(370)。

(27) 例え一八九〇年一月七日、田中宛山県書簡(340)は、古稀庵の新年を報告するとともに、岩淵別荘の落成を祈っている。

(28) 無隣庵については、作庭を担当した植治・七代目小川治兵衛への関心も手伝って優れた研究が多い。最新の研究成果として尼崎博正『七代目小川治兵衛』ミネルヴァ書房(二〇一二年)、鈴木博之『庭師小川治兵衛とその時代』東京大学出版会(二〇一三年)が挙げられるが、特に無隣庵に関する事実関係については両研究とも矢ヶ崎善太郎『近代京都の東山地域における別邸・邸宅群の形成と数寄空間に関する研究』(京都工芸繊維大学博士論文、一九九八年)に多くを負っている。

これらの研究は総じて小川治兵衛によって作庭された無隣庵を「自然主義」の庭として高く評価し、山県を小川を導いた施主として評価する傾向にある。こうした評価は基本的に一貫しているが、低く評価するものとして京都市観光課『京都市蹟古美術提要』(一九四一年)における清水卓夫の記述を挙げることができる。ここで清水は無隣庵の庭を「復古主義的」だが「理解が乏しきため、単なる模倣に終つてゐる」という評価を下している。

- (29) 一八九二年、月不明、十八日、山県宛中井弘書簡(16)。
- (30) 前掲・矢ヶ崎(一九九八)一三〜一四頁。
- (31) 一八八九年四月十二日、山県宛品川弥二郎書簡(11)。
- (32) 一八九三年六月二十一日、山県宛森寛斎書簡(1)。
- (33) 一八九三年三月十六日、田中宛山県書簡(260)。
- (34) 一八九三年三月二十四日、田中宛山県書簡(57)。

(35) 一八九五年五月二十四日、田中宛山県書簡(231)。矢ヶ崎善太郎はこれを山県の田中光頭に対する京都における別邸誘致に関するものとして位置付けているが、時期としても内容としても第三次無隣庵に関するものと解すべきである。田中光頭に対する別邸誘致については後で検討したい。

(36) 一八九五年五月十四日、田中宛山県書簡(47)。

(37) 京都市土木局庶務課『無隣菴』(一九四一年)。

(38) 一八九五年二月二十日、山県宛田中書簡(16)。

(39) 一八九五年四月十九日、田中宛山県書簡(55)。

(40) 『供奉員の旅館』『東京朝日新聞』一八九五年四月二十六日。

(41) 前掲・矢ヶ崎(一九九八)一六頁、前掲・鈴木(二〇一三)六七頁。矢ヶ崎は『京都日出新聞』の記載から、鈴木は田中宛山県書簡から、それぞれこのことを指摘している。なお、この田中宛山県書簡は、一八九五年十月二十二日、田中宛山県書簡(63)であり、鈴木は前掲・古稀庵記録保存調査団・鈴木博之(一九八二)ですでに指摘を行っていた。

(42) 一八九五年十一月八日、桂太郎宛山県書簡(千葉功編『桂太郎関係文書』東京大学出版会、二〇一〇年、文書番号104―32)。

(43) 「山県大将」『京都日出新聞』一八九六年十一月二十九日。

(44) 前掲・矢ヶ崎(一九九八)一六頁。

(45) 「山県大将」『京都日出新聞』一八九七年三月二十日。

(46) 一九〇一年四月二十六日、山県宛二宮熊次郎書簡(4)。

(47) 前掲・矢ヶ崎(一九九八)一七頁。この区画は山県以前・以後の築庭区域とはば対応しているものと思われる。黒田天外「山県侯の無隣庵」『続江湖快心録』(一九〇七年)参照。

(48) 一八九六年八月二十日、山県宛田中光頭書簡(19)。

(49) 高橋等庵述「山県公別荘記」『山県有朋伝記編纂資料(写本)』(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。また、徳富蘇峰は「公の在る所、必ず庭あり、庭の在る所、必ず水あらざるなし」と評した(「山公遺烈を読む」徳富蘇

- 峰『人物偶録』民友社、一九二八年。当該箇所のは初出は一九二五年五月。
- (50) なお、この時山県は鴨川で納涼も楽しんでた(一九六七「慶応三」年四月三十日、木戸孝允宛山県書簡『山県有朋伝記編纂資料』。第二次無隣庵の地所にも同じような過去の記憶が根付いていたのかもしれない。
- (51) 『葉校日記』一二頁(日本史籍協会編『山県公遺稿・こしのやまかぜ』東京大学出版会、一九七九年、二二六頁)。
- (52) 『葉校日記』一三頁(『山県公遺稿・こしのやまかぜ』一三七頁)。
- (53) 『雨中望東山』「葉校日記」一七頁(『山県公遺稿・こしのやまかぜ』二四一頁)。ただし題は「椿山詩存」三頁(『山県公遺稿・こしのやまかぜ』五〇五頁)のものを採用した。
- (54) 一八六九年十一月十七日、木戸宛山県書簡(『公爵山県有朋伝』中巻、二九頁)。
- (55) 入江貫一『山県公のおもかげ』博文館(一九二二年)六六頁。同志の墓の重要性については奈良岡聰智、中村武生両氏からご教示いただいた。
- (56) この活動の存在については矢ヶ崎善太郎の指摘がある(矢ヶ崎(一九九八)五二―五五頁)。ところが、史料操作に問題があり、その実態について正確な把握とは言えないため、ここで簡単に整理しておきたい。
- (57) この地所が第二次無隣庵である可能性は非常に高いと考えられるが、気になるのは一八六九(明治二)年の書簡に「鴨西水楼」という地所が登場することである(一八六九年四月十一日、木戸孝允宛山県書簡『山県有朋伝記編纂資料』。①「鴨川水楼」は第二次無隣庵であり、「鴨西水楼」とは別、②「鴨川水楼」Ⅱ「鴨西水楼」であって、それは第二次無隣庵とは別、③第二次無隣庵Ⅱ「鴨川水楼」Ⅱ「鴨西水楼」であって、つまり、山県は以前から利用していた地所を別邸とした、という三つの可能性があり(論理上は「鴨川水楼」も「鴨西水楼」も第二無隣庵も別という可能性もあるが、③が最もドラマチックではあるけれど、今のところそれを証明する史料はない。
- (58) 「一八九二」年八月十八日、田中宛山県書簡(236)。次の山県宛田中書簡の内容との関係から年代推定を行った。
- (59) 一八九一年八月二十一日、山県宛田中書簡(11)。
- (60) 実際、山県は幕末維新の記録を残すにあたつて、しばしば田中光顕に確認を求めることがあった。
- (61) 「一八九七」年二月十五日、田中宛山県書簡(156)。
- (62) 「一八九七」年二月十九日、田中宛山県書簡(297)。
- (63) 一八九七年二月九日、田中宛山県書簡(59)。
- (64) 一八九七年三月十一日、田中宛山県書簡(293)。
- (65) 明治年間、十一月二十五日、田中宛山県書簡(10)。
- (66) 一八九八年一月一日、山県宛伊藤博文書簡(44)。
- (67) 「政界の奥座敷」としての大磯については、とりあえず奈良岡聰智「近代日本政治と「別荘」簡井清忠編『政治的リーダーと文化』千倉書房(二〇一一年)を参照。
- (68) 平井政道「橋本先生と山県公」日本赤十字社病院編『橋本綱常先生』日本赤十字社病院(一九三六年)四四二頁。
- (69) 一八九八年一月一日、山県宛伊藤博文書簡(43)。もつとも、伊藤が風邪のため伊藤の別荘であつた滄浪閣へ開催地が変更された。同日、伊藤宛山県書簡(早稲田大学古典籍総合データベース・チ06 03890 0105 0002)も参照。
- (70) 一八九八年一月四日、山県宛田中書簡(32)。このように無隣庵に向かう途中に小洑庵に滞在しているケースは他にも見ることができる。例えば、明治年間、八月一日、田中宛山県書簡(289)、一八九五年十月十五日、田中宛山県書簡(290)、年不明、七月三十一日、曾禰荒助宛山県書簡(『公爵山県有朋伝編纂資料』所収)。
- (71) 一八九八年一月一日、伊藤宛山県書簡(伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書(全九巻)』塙書房、一九七三―一九八一年、山県書簡96)。

(72) 一八八八年一月五日、山県宛伊藤博文書簡(45)。

(73) 一八八八年一月六日、田中宛山県書簡(308)。

(74) 一八八八年三月十七日、山県宛田中書簡(33)。

(75) 年不明、七月三十日、西郷従道宛山県書簡(『公爵山県有朋伝編纂資料』所収)。

(76) 例えば「一八九三〜一八九五」年二月十五日、田中宛山県書簡(196)、

一八八八年八月二十日、山県宛内海忠勝書簡(4)、一九〇五年十月二十二日、山県宛松方正義書簡(15)。他に、山県と直接関係がないものとして、

一九〇〇年十二月二十五日、伊藤宛井上書簡(『伊藤博文関係文書』井上書簡303)、明治年間、十一月十五日、伊藤宛井上書簡(同上358)。

(77) 明治年間、七月五日、田中宛山県書簡(272)、一八九〇年二月九日、伊藤

宛山県書簡(『伊藤博文関係文書』山県書簡61)、一八九一年六月二十六日、田中宛山県書簡(173)、明治(二十四)年七月十日、田中宛山県書簡(214)、

年不明、七月三十日、松方宛山県書簡(大久保達正監修『松方正義関係文書(書翰篇)第六〜九巻』大東文化大学東洋研究所、一九八五〜一九八八

年、文書番号276・139)。

(78) 一八八六年十二月二十四日、山県宛陸奥宗光書簡(9)。

(79) もつとも、その活性化如何はもっぱら伊藤にかかっていたように思われる。『山県有朋関係文書』中にも、伊藤が大磯で山県との面会を求める書簡

があるほか、山県が松方に大磯で伊藤と予算方針を相談するように求めたものもあり(年不明、七月四日、松方宛山県書簡、『松方正義関係文書』

276・76)、一九〇一年一月七日、山県宛芳川顕正書簡(18)は、そのような

大磯の雰囲気批判するものである。伊藤の渡韓前にも伊藤・山県の会見

場所として一時的に大磯が活性化している様子は、一九〇五年十月二十四

日、山県宛伊藤書簡(71)、同三十日、山県宛伊藤書簡(72)にうかがわれ

る。

(81) 一八八九年六月十二日、伊藤宛井上書簡(『伊藤博文関係文書』井上書簡

227)。

(82) もつとも、伊藤はその心意気という程度に過ぎないし、また井上の真意

も一時退却にあつただろうと想像される(「一八八九」年七月十六日、松方

宛井上書簡、『松方正義関係文書』53・25)。とはいえ、仮にその隠遁の地

が小田原や鎌倉でなく大磯であつたなら「隠居」や「退職」という便法す

ら通用しなかつたであろう。

(83) 徳富蘇峰編述『公爵山県有朋伝』下巻、一二二頁。

(84) 佐々木隆「明治時代の政治的コミュニケーション(その2)」『東京大学

新聞研究所紀要』三十三号(一九八五年)一三三頁。

(85) 一八九一年七月十日、田中宛山県書簡(214)。

(86) 一八九五年十一月十四日、山県宛田中書簡(18)。

(87) 一八九六年八月二十八日、山県宛田中書簡(21)、同八月二十九日、山県

宛田中書簡(22)。

(88) 佐々木隆「明治時代の政治的コミュニケーション(その3)」『東京大学

新聞研究所紀要』三十五号(一九八六年)一四五頁。佐々木論文は、他の

政治家たちをも対象にして、故郷への退去や別荘・別邸への居住の政治的

意味について包括的に議論した重要な業績である。

(89) 四月からは謡曲の稽古を始めている(「一八九八年四月五日、渡辺千秋宛

山県書簡、尚友俱樂部・長井純市編『渡辺千秋関係文書』山川出版社、

一九九四年、文書番号1)。

(90) 一八九八年四月十一日、山県宛芳川書簡(10)、同十六日、山県宛芳川書

簡(11)、同二十日、山県宛田中書簡(34)、五月十七日、山県宛芳川書簡(12)。

(91) 例えば一九〇〇年四月二十日、田中宛山県書簡(343)。

(92) 前掲・鈴木(二〇一三)七八頁。

(93) 一八九九年九月七日、山県宛芳川顕正書簡(14)。

(94) 『日出新聞』一八九六年十一月十二日、十三日。

- (95) 一八九八年十月十一日、山県宛品川弥二郎書簡(33)。
- (96) 「真に退隱の心ある乎」『東京朝日新聞』一九〇〇年十一月一日。
- (97) 山県の寂しがりをよくうかがわせる歌としては次を挙げたい。小湊庵滞在中に川の氾濫で連絡が途絶えたときのものである。
「世のことをしらする文もたえはてゝひるも暗夜のこゝちこそすれ」
(一九〇七年八月二十七日、渡辺千秋宛山県書簡『渡辺千秋関係文書』11)
- (98) 「山県前首相の詩」『東京朝日新聞』一九〇〇年十二月六日。
- (99) 「山侯杉子の近仕」『東京朝日新聞』一九〇一年三月二日。
- (100) 無憂樹『忘れぬ人々』金尾文淵堂(一九二四年)一二六頁。
- (101) 例えば、一九〇三年十月一日、山県宛寺内正毅書簡(3)、一九〇四年一月十二日、山県宛徳大寺実則書簡(38)。
- (102) 一九〇一年三月一日、山県宛清浦圭吾書簡(16)。
- (103) 一九〇一年二月一日、山県宛石黒忠恵書簡(7)。
- (104) 一九〇六年九月六日、山県宛田中光顕書簡(49)。
- (105) 「桂首相京都に立寄らず」、「京都に於ける伊藤侯」『東京朝日新聞』一九〇二年十一月二十六日。いずれも二十五日の京都特報であり、二十五日の出来事である。
- (106) 「山公園侯会見」『東京朝日新聞』一九一八年五月二日。この記事によれば、四月三十日に西園寺が無隣庵を訪問し、翌日山県が清風荘を訪問したという。
- (107) 例えば一九〇八年一月八日、山県宛渡辺千秋書簡(3)、一九〇八年一月二十八日、田中宛山県書簡(92)。
- (108) もちろん、小湊庵の売却代金が古稀庵の敷地購入費になったということも考えても、小湊庵と古稀庵との連続性は明らかではある。だが、ここではその邸宅の位置付けに注目して敢えて無隣庵から古稀庵という変化を見る。
- (109) 『東京朝日新聞』一八九八年八月十二日。
- (110) 一九〇七年一月二十三日、田中宛山県書簡(353)。
- (111) 例えば明治年間、十月五日、田中宛山県書簡(368)。
- (112) 一九〇〇年十二月十日、山県宛田中書簡(44)。
- (113) 「一九〇〇」年十二月十七日、田中宛山県書簡(100)。
- (114) 実際、古稀庵初期の書簡には古稀庵に「罷越」して「静養」するという定型が観察される(日時不明、渡辺千秋宛山県有朋書簡『渡辺千秋関係文書』34、一九〇八年三月二十三日、同13、一九〇九年一月三日、同16、年不明、四月三十日、同63)。
- (115) 一九〇七年八月十二日、渡辺千秋宛山県書簡(『渡辺千秋関係文書』10)。
- (116) 一九〇八年一月二十八日、田中宛山県書簡(92)。
- (117) 「大正元年二月 桂太郎と対談及往復の書翰 全」前掲『山県有朋関係文書』第一巻、三八六～三八七頁。逆に会えなかった例として、一九〇八年二月十八日、山県宛石黒忠恵書簡(13)。
- (118) 一九一五年六月十一日、田中宛山県書簡(『公爵山県有朋伝編纂資料』所収)。
- (119) 元老同士は参内などの機会を利用して東京で行われることが多かった。例えば一九一〇年一月二十一日、山県宛松方正義書簡(17)、一九一五年七月二十七日、山県宛松方書簡(26)。松方との会見については、一九一九年六月九日、山県宛平田東助書簡(38)も触れている。伊藤博文が大磯で元老同士の意思疎通をプロデュースしていたことの重要性は、ここにて元老たちに再確認されたに違いない。
- (120) もつとも土方久元など、あくまで帰京を待った者もいたが、山県が上京しないために書簡で対応するはかなくなった(一九一六年七月二十五日、山県宛土方久元書簡(4))。
- (121) 前掲・佐々木(一九八六)一四七頁。
- (122) 一九一二年、月日不明、山県宛二宮熊次郎書簡(13)。
- (123) 書簡としては、一九一七年十一月十四日、芳川顕正書簡(28)がこの転

居に触れている。

(124) 前掲・『公爵山県有朋伝』下巻、一一四五頁。

(125) 「明治建築座談会（第2回）」『建築雑誌』四十七卷五六六号（一九三三年一月号）一五六頁。一九三二年六月三日に開催された座談会の記録。

(126) 前掲・一八八八年十一月十一日、田中宛山県書簡（152）。

(127) 「一八八八」年十一月十八日、田中宛山県書簡（18）。年代推定の理由は本文の通り。

(128) ただし、問題はそこまで簡単ではない。十一月十一日の「財産取調書」には第二無隣庵に関する記述がないため、「京師木屋町別邸之如く」という文意を通じさせるためには、十一日から十八日までの間に田中・山県間に第二無隣庵に関する情報交換が必要だが、直接面会したのか管見の限り書簡が現存しない。また、そもそも「京師木屋町別邸之如く」とはどのような意味であろうか。前掲・矢ヶ崎（一九九八）によれば、山県が第二次無隣庵の土地を取得するのは一八九一年のことであるから、仮に第二次無隣庵がこの時点で成立していたとしても遺産相続で問題になるような所有地は存在せず、伝記の記述を信じて五番町の土地は所有地だったと考えるならこれらの土地を同様に処理するという書簡の表現はストレートには理解できない。ただし、「〇〇に一任する」というような遺言書の記載があつた可能性は残されており、とりあえずここでは一八八八年の年代推定を維持したい。

(129) 一九一六年六月三十日、山県宛大島健一書簡（5）。

(130) 前掲・『公爵山県有朋伝』下巻、一一四五頁。

(131) 一九二〇年六月二十八日、田中宛山県書簡（『公爵山県有朋伝編纂資料』所収）。

(132) 例えば、「打ち沈んだ含雪公 鼻かぜと心配で減切弱つた此二三日」『東京朝日新聞』一九二二年二月十五日。

(133) 一九一二（明治四十五）年一月十一日、山県宛清浦圭吾書簡（22）。

(134) なお、建築の側からも鎌倉や大磯の邸宅に対する批判が存在していた。

岡田信一郎（談）「別荘建築（邸宅式は本来の目的でない、周囲の風景と調和せしめよ）」『建築雑誌』二十四卷二七九号（一九二〇年三月号）。岡田が果たして山県の邸宅を評価したかどうかは不明だが、彼の自然主義の庭は比較的に当時の建築学会の風潮と軌を一にしていたと言える。

(135) 『原敬日記』一九一四年九月三日の条。

(136) 『原敬日記』一九一六年六月十二日の条。

(137) 一九〇九年一月十三日、田中宛山県書簡（356）、同日、桂宛山県書簡（『桂太郎関係文書』104―156）。

(138) 山下亀三郎「山県元帥と対潮閣」『浮きつ沈みつ 天』山下秘書部（一九四三年）。

(139) 前掲・黒田天外「山県侯の無隣庵」。

(140) 市島謙吉『大隈侯一言一行』早稲田大学出版部（一九二三年）。この訪問は一九〇二年五月のことであつたという。

(141) 前掲・高橋箒庵述「山県公別荘記」。

(142) 一八九八年八月十五日、山県宛児玉少介書簡（4）。次注の著書により、訪問日は八月二日だったことがわかる。

(143) 児玉少介『花影鶴蹤』（一九九八年）三頁。

(144) 前掲・鈴木（二〇一三）六二―六三頁。

(145) 明治年間、四月十六日、山県宛高橋義雄書簡（1）。

(146) 日露戦争中には、山県は奥保章に命じて、中国の古寺の石造獅子一對を手に入れようとしている（「一九〇五」年六月十二日、石黒忠憲宛奥保章書簡、『公爵山県有朋伝編纂資料』所収。営口経由で本国に送る旨の記述があることから、営口占領後の一九〇五年と推定した）。山県にこのような略奪の傾向があつたことは、日清戦争中と見られる書簡においても「分捕品」について指示をしていることからうかがわれる（年不明、四月二十一日、岡澤精一宛山県書簡、『公爵山県有朋伝編纂資料』所収）。

付記

本論文は国際日本文化研究センター共同研究「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」(研究代表・御厨貴)において「無隣庵再考」と題して行つた報告を出発点としたものである。また、京都造形芸術大学において行われたセミナー(The Japanese Garden Intensive Seminar Plus in Kyoto)で行つた招待講演

(147) 「山県侯の談話」『東京朝日新聞』一九〇一年八月十八日。

(148) 前掲・黒田天外「山県侯の無隣庵」。

(149) 前掲・『公爵山県有朋公』下巻、一一七二頁。

(150) 前掲・鈴木(二〇一三)六〇頁、ただし鈴木は、同じ逸話を高橋箒庵(義雄)「古稀庵の半日」『東都茶会記』(淡交社、一九八九年)から引用している。

(151) 前掲・尼崎(二〇一二)四九頁。ただし尼崎は、同じ逸話を高橋義雄『山公遺烈』(慶文堂、一九二五年)から引用している。なお、東山と煎茶文化についての概観は、たとえば矢ヶ崎善太郎「京都東山の近代と数寄空間」『日本歴史』七五二号(二〇一一年)。

(152) 今「自己の館」と言つたが、そもそも権力的な意味で言えば、「自己の館」とは自己が操作可能な範囲のことを指すのではないだろうか。他人の館であつたとしても、その空間をその主人よりよりよく使いこなすことができるなら、それはもはや「自己の館」であろう。

(153) 一九一九年に訪問した本多熊太郎『先人を語る』千倉書房(一九三九年)六〇七頁、一九二〇年一月中旬に訪問した小原達明「山県公を思ふて」大川白雨編『小原達明随筆集』朝陽社(一九二六年)四七頁。

(154) 建築学上の「使われ方」という言葉を用いてもよいが、三つのレベルのそれぞれにおいて機能する「操作」との混同を避けるため、ここでは暫定的に建築内部という用語を用いる。

“Gardens for Politicians in Prewar Japan”も研究を進めるのに大きく役立った。それぞれの報告の場をくださった先生方、コメントをくださった方々に感謝したい。なお、本論文は日本学術振興会二〇一四年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費・研究課題番号13J09147)による研究成果の一部である。